臨地実習事前事後指導における スチューデント・アシスタント活用の効果

長幡友実*・小池亜紀子*・徳永佐枝子*・古橋啓子*・兼平奈奈*

１．はじめに

近年、我が国の大学進学率は50%を超え、入学する学生も多様化しつつある。そのため、大学は、教員の研究に重点を置く「教員中心の大学」から、多様な学生に対するきめ細やかな教育・指導に重点を置く「学生中心の大学」へと視点の変換を図ることが求められている（文部科学省中央教育審議会，2000）。2000年に文部科学省高等教育局から出された「大学における学生生活の充実方策について：学生の立場に立った大学づくりを目指して」によると、学生中心の大学づくりへの方策として、教職員の意識改革の他に、人的資源の一つである学生の活用が考えられている。また、従来から、優秀な大学院生をティーチング・アシスタント（TA）として学部学生の教育の補助業務に活用する制度が存在していたが、学士課程の上級生にもこのような機会を積極的に与えていくことが推奨されている。現在、授業支援に携わる学士課程の学生は、TAとは区別してスチューデント・アシスタント（SA）と呼ばれている。

我が国において、授業でのSA活用事例は増えてきており、様々な報告がみられる。活用する授業科目として、情報関連授業（岩崎ら，2008、野波ら，2004）や基礎演習（毛利，2006）、グループ討論を含む講義科目（高瀬，2017）等が報告されている。また、授業内での業務として、資料配布、出席やレポートの管理、教室でのPCやプロジェクタ等のセッティング、試験監督補助等（岩崎ら，2008）、情報教育自習室の質問受けと教室管理、情報関連授業のアシスタント等（野波ら，2004）、学生への質問への応答、学生の報告やディベートへのコメント、ディベートの運営等（高瀬，2017、毛利，2006）が報告されている。以上の報告から、教員１名での対応に限界がある授業科目や業務においてSAが活用されていると考えられる。

本研究では、管理栄養士養成課程の臨地・校外実習（以下、実習）の事前事後指導に関する科目である「栄養総合演習Ⅰ」において、SAを活用した。実習は、３年次の様々な時期に様々な施設（各学生２～３施設）で実習を行うことから、本科目では、各学生、各施設に合わせた個別サポートが必要となる。しかし、受講者数108名（2018年度）に対し、科目担当教員は、専任教員６名である。実習の事務的業務を行う実習センター職員２名（繁忙期のみ３名）と学科助手３名の補助はあるものの、この限られた人的資源の中で、教育の質を高めるためには限界がある。そこで、今回、学部学生（４年生）10名をSAとして活用したので、その効果を報告する。

２．研究方法

2-1. SAの授業介入方法

2-1-1. SAが介入した授業

平成30年４月から７月（平成30年度春学期）に、３年生対象に開講された「栄養総合演習Ⅰ」（全15回）

* 東海学園大学健康栄養学部

の授業のうち、計12回、4年生10名をSAとして活用した。「栄養総合演習Ⅰ」とは、管理栄養士養成課程の必須科目である臨地・校外実習の事前・事後指導を行う授業であり、本学では、2限連続の授業として開講されている。なお、SAは時間割の関係上、1限目（表1のグレーで示した部分）のみ活用した。また、平成30年度の本科目の受講者数は3年生108名（男性9名、女性99名）であった。本学では、実習分野として、病院、福祉施設、保健所、学校、事業所の5分野があり、その中から、各学生は1～3分野（病院2単位は必須、合計4単位以上）に配置され実習を行っている。なお、実習施設の受け入れ可能人数は各施設で異なっており、各施設への1回あたりの配置人数はおおよそ1～6名である。

「栄養総合演習Ⅰ」の大まかな授業内容を表1に示した。内容は、大きく3つに分類できる。1つ目は、学生全員対して一斉に行う指導（以下、全体指導）であり、実習の流れや各種提出書類等の説明、および学外講師による社会人としてのマナーや身だしなみ、実習先での心構え等の講話が含まれる。2つ目は、実習施設別に行う個別指導（以下、各施設指導）である。各施設指導では、各実習施設に1名の担当教員が付き、各施設から出された課題や事前学習、実習ノート等について、各施設に合わせた指導を行うものである。3つ目は、実習分野ごとに集めて一斉に行う指導（以下、分野別指導）である。例年、春学期の実習、すなわち学生にとって初めての実習の大部分は保健所、学校、事業所分野であるため、分野別指導では、保健所、学校、事業所の3分野について行った。

2-1-2. SAの選出方法

教員とSAとの授業に関する打ち合わせのしやすさを考え、「栄養総合演習Ⅰ」を担当する専任教員のゼミ生を中心に、4年生から10名選出した。また、その際に、各SAが3年次に経験した実習分野に偏りが出ないよう配慮した。その結果、SA10名が3年次に経験した実習分野は、病院10名、福祉施設6名、保健所4名、学校3名、事業所3名となった。

2-1-3. SAの介入内容

毎回の授業前の10分間、SAに対し、科目担当教員から当日の業務内容や注意点等についてオリエンテーションを行った。

SAには主に、3つの介入を行ってもらった。1つ目は、学外講師による講話の際に学生が書いた感想レポートの添削指導である。SA10名で分担し、各施設指導の時間内で各レポートの誤字脱字や体裁、字の丁寧さ等について、教員が指定した項目について添削してもらった。また、次の授業時に返却し、学生全体に対し、レポートを書く際に気を付けてもらいたいことをアナウンスしてもらった。2つ目は、多くの学生が初回の実習を行う直前の8回目の授業時に、全体指導の一環として「臨地実習で何を学ぶか」について、SA4名にパネルディスカッションをしてもらった。教員がファシリテーターを行い、自分たちが実習で学んだことや学びを多くするために自分たちが意識したこと等についてディスカッションをしてもらった。3年生は、そのディスカッションを聞きレポートを書いた。3つ目は、SA自身が経験した分野に配置された学生に対する各施設指導と分野別指導である。具体的には、分野別指導でのアドバイス、15回目の授業時に行った実習報告会用のパワーポイントや発表原稿指導補助、実習先からの課題指導補助等である。いずれも担当教員の指示のもと業務を行ってもらった。

2-2. 調査対象者と実施方法

SAの授業介入前後で「栄養総合演習Ⅰ」受講者108名に対し、自記式質問紙調査を行った。事前調査は授業介入開始時の2回目の授業時、事後調査は13回目の授業時に、集合法で行った。その際に、周りと相談せず一人で回答するよう促した。

事前調査の調査票の内容は以下の通りである。①「あなたの臨地実習の分野を教えてください。」に対し、1～3施設目の実習ごとに「病院」、「福祉」、「保健所」、「学校」、「事業所」から1つ選んでもらった。②「あなたはこの授業でSAのサポートを受けたいと思いますか。」に対し、「とても受けたい」、「まあ受けた

い」、「どちらともいえない」、「あまり受けたくない」、「全く受けたくない」から１つ選んでもらった。③「この授業においてSAから受けてみたいサポートを教えてください。」に対し、「臨地実習に向けての心構えや身だしなみ等の話を聞く」、「プロフィール票、実習ノート、報告書等の文章の書き方の指導」、「実習先からの課題の指導」、「臨地実習の内容に関して直接話を聞く」、「その他」、「サポートは受けたくない」から当てはまるもの全てを選んでもらった。④「SAのサポートを受けると、あなたにとってのメリットはどの程度だと思いますか。」に対し、「とてもある」、「まあある」、「どちらともいえない」、「あまりない」、「全くない」から１つ選んでもらった。

表１　栄養総合演習Ｉの授業内容

回	授業内容（SAが参加した回はグレー色）	
	１限目	２限目
1	全体指導 ・臨地実習に向けて ・栄養総合演習Ｉとは ・臨地・校外実習の流れ　等	全体指導 ・事前学習について ・検便について ・各種提出書類の書き方　等
2	全体指導 ・SA紹介 分野別指導〔保健所〕 各施設指導	全体指導 ・実習ノート等の書き方 ・実習関連配布物の説明　等
3	全体指導（学外講師講演） ・マナーと身だしなみ	全体指導（学外講師講演） ・マナーと身だしなみ
4	分野別指導〔事業所分野、学校分野〕 各施設指導	全体指導（学外講師講演） ・臨地実習概要について
5	分野別指導〔保健所分野〕 各施設指導	各施設指導
6	分野別指導〔事業所分野、学校分野〕 各施設指導	各施設指導
7	全体指導 各施設指導	全体指導（学外講師講演） ・臨床栄養分野について
8	全体指導 ・SAによるパネルディスカッション 「臨地実習で何を学ぶか」	全体指導 各施設指導
9	分野別指導〔事業所分野、学校分野〕 各施設指導	各施設指導
10 ｜ 14	全体指導 各施設指導	各施設指導
15	全体指導 ・春学期実習報告会	全体指導 ・夏休みの諸注意 ・春学期の総合評価

＊全体指導とは「学生全体対して一斉に行う指導」、各施設指導とは「実習施設別に行う個別指導」、分野別指導とは「各施設を分野（保健所、学校、事業所の３分野）でまとめて分野別で一斉に行う指導」を指す。

事後調査の調査票の内容は以下の通りである。①「SAによるレポートの添削指導は役立ちましたか。」に対し、「役立った」、「まあ役立った」、「どちらともいえない」、「あまり役立たなかった」、「全く役立たなかった」から１つ選んでもらった。②「SAによるパネルディスカッション「臨地実習で何を学ぶか」はあなたの為になりましたか。」に対し、「為になった」、「まあ為になった」、「どちらともいえない」、「あ

まり為にならなかった」、「全く為にならなかった」から１つ選んでもらった。③「あなたはSAから直接、個人やグループに対するサポートを受けましたか。」に対し、「はい」または「いいえ」から１つ選んでもらった。そして「はい」を選んだ場合、次の④から⑥に回答してもらった。④「どの分野でサポートを受けましたか。」に対し、「病院」、「福祉」、「保健所」、「学校」、「事業所」から１つ選んでもらった。⑤「SAから受けたサポートを教えてください。」に対し、「分野別指導でのアドバイス」、「パワーポイント・発表原稿の指導」、「実習先からの課題の指導」、「臨地実習の内容に関して直接話を聞く」、「その他」から当てはまるもの全てを選んでもらった。⑥「あなたはこの授業でSAのサポートを受けて良かったと思いますか」に対し、「とても良かった」、「まあ良かった」、「どちらともいえない」、「あまり良くなかった」、「全く良くなかった」から１つ選んでもらった。⑦「秋学期の栄養総合演習Ⅱにおいて、SAのサポートを受けたいと思いますか。」に対し、「とても思う」、「まあ思う」、「どちらともいえない」、「あまり思わない」、「全く思わない」から１つ選んでもらった。

2-3. 倫理的配慮

調査実施直前に、本調査の目的と調査への協力は任意であること、協力しないことによって不利益を被ることはないこと、また、本調査は無記名で行い、個人が特定されることがないことを口頭で説明した。なお、個人が特定されることがないよう、返却された調査票にランダムな番号を振り分け、データ管理を行なった。

2-4. 統計解析

回収した質問紙のデータはIBM SPSS Statistics 22を用いて単純集計を行った。

３．結果

3-1. 事前調査結果

事前調査票は２回目の授業出席者107名に配布し、107名から返却された。図１に臨地実習先の分野を示した。１施設目は保健所、学校、事業所で実習を行う学生が多く、合わせて約７割を占めていた。2、3施設目では病院および福祉施設の割合が増加した。例年、本学では学生の希望をとった上で、春学期中に１施設目（主に保健所、学校、事業所）、８月以降に２施設目、３施設目としてその他の分野の施設を教員側で配置しているため、それを反映した結果となっている。

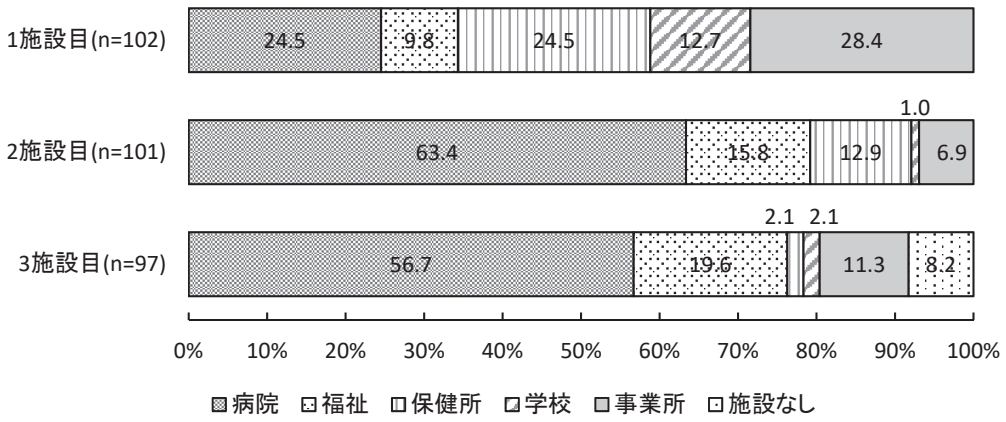


図１　学生の実習先分野

図２に「この授業でSAの指導を受けたいかどうか」についての結果を示した。約８割の学生が「とても受けたい」、「まあ受けたい」と回答していた。一方、サポートを「全く受けたくない」と回答した者はいなかった。また、図は示していないが、「SAの指導を受けると、あなたにとってのメリットはどの程度だと思いますか。」という質問に対し、「とてもある」、「まあある」が９割以上であった。

さらに、受けてみたい指導としては、表２に示したように、プロフィール票、実習ノート、報告書等の文章の書き方指導、実習先からの課題の指導が約８割、実習の内容について直接話を聞くが約７割、実習に向けての心構えや身だしなみ等の話を聞くは約６割であった。

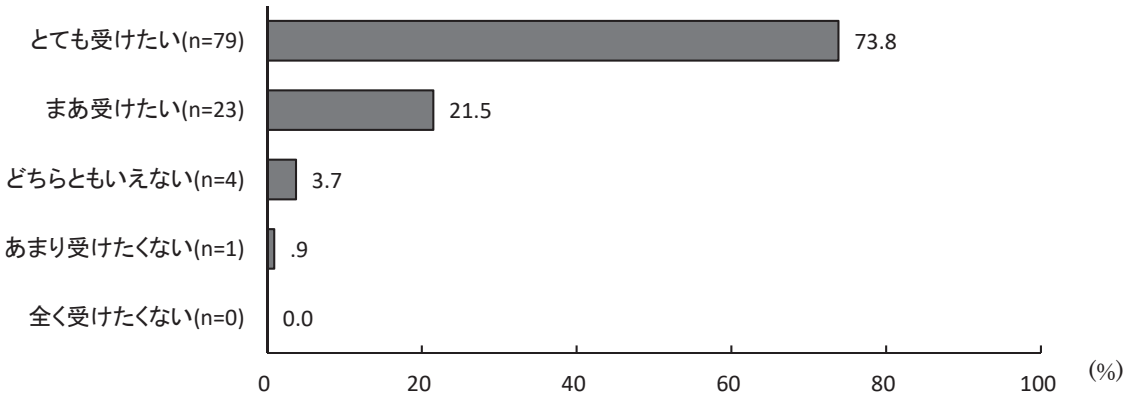


図２　この授業でSAの指導を受けたいか

表２　この授業でSAから受けてみたい指導

	n	(%)
プロフィール票、実習ノート、報告書等の文章の書き方指導	88	(82.2)
実習先からの課題の指導	86	(80.4)
実習の内容に関して直接話を聞く	78	(72.9)
実習に向けての心構えや身だしなみ等の話を聞く	63	(58.9)
サポートは受けたくない	0	(0.0)
その他	0	(0.0)

＊複数回答可

3-2. 事後調査結果

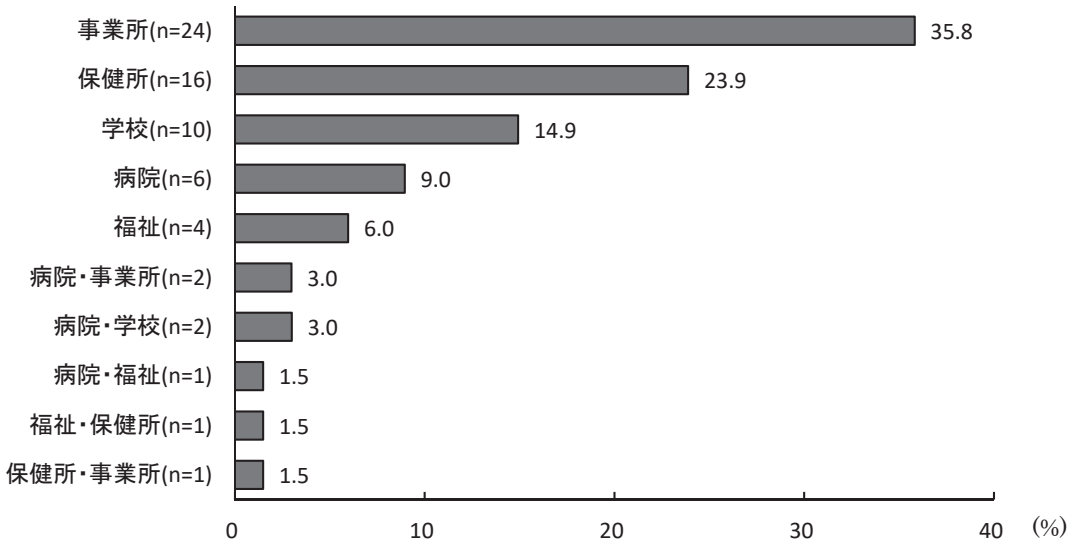
事後調査票は13回目の授業出席者106名に配布し、106名から返却された。授業内で行った２つのSAによる全体指導の評価を表３に示した。学外講師による講話の際に提出されたレポートの添削指導、多くの学生が初回の実習を行う直前の８回目の授業時に行った、SAによるパネルディスカッション「臨地実習で何を学ぶか」に関し、両者とも約９割の学生が「役立った」、「まあ役立った」と評価していた。

分野別指導や各施設指導として、個人やグループに対して直接指導を受けたのは67名（63.2%）、受けていないのは39名（36.8%）であった（図表には示していない）。これは、春学期に臨地実習がある学生へはSAから直接指導を受けるよう教員が促したが、それ以外の学生は自主性に任せたことが反映されている。また、SAの指導を受けた分野としては、事業所が約3.5割と最も多く、次いで保健所が約２割、学校が1.5割と続いた（図３）。

表３　SAの全体指導の評価

	役立った	まあ役立った	どちらともいえない	あまり役立たなかった	全く役立たなかった
レポートの添削指導	61（57.5）	33（31.1）	8（7.5）	3（2.8）	1（0.9）
SAによるパネルディスカッション	61（57.5）	31（29.2）	9（8.5）	4（3.8）	1（0.9）

＊人数（%）で示している。



＊複数回答可、２分野併記されている場合は、２分野で指導を受けたことを示している。

図３　SAから直接指導を受けた実習先分野

SAから受けた分野別指導、各施設指導の内容を表４に示した。分野別指導でのアドバイスが約6.5割、次いで実習報告会用のパワーポイント・発表原稿指導が約４割、実習の内容に関して直接話を聞く、および実習先からの課題指導が約３割であった。（表４）

図４に「分野別指導・各施設指導を受けて良かったと思うか」の質問に対する結果を示した。ほぼ100%の学生が「とても良かった」、「まあ良かった」と回答していた。また、図に示していないが、秋学期の栄養総合演習Ⅱ（実習事前事後指導の授業）においてSAの指導を受けたいと思うかという質問に対し、「とても思う」が53名（53.5%）、「まあ思う」が28名（28.3%）、「どちらともいえない」が11名（11.1%）、「あまり思わない」が５名（5.1%）、「全く思わない」が２名（2.0%）であった。

表４　この授業でSAから受けた分野別指導・各施設指導の内容

	n	(%)
分野別指導でのアドバイス	44	(65.7)
実習報告会用のパワーポイント・発表原稿指導	27	(40.3)
実習の内容に関して直接話を聞く	21	(31.3)
実習先からの課題指導	19	(28.4)

＊複数回答可

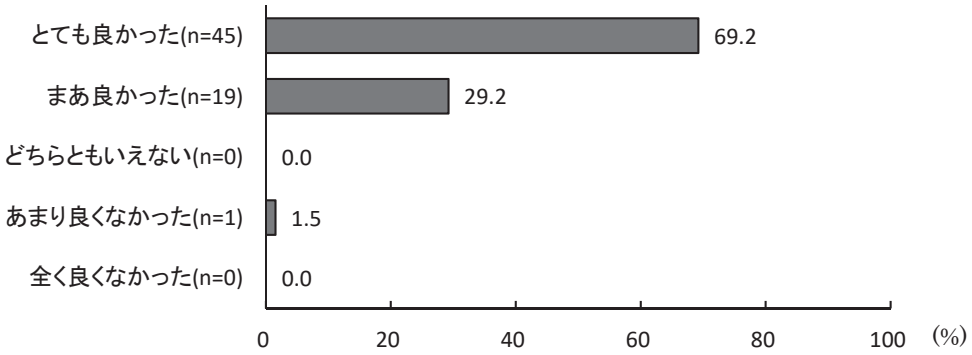


図４　分野別指導・各施設指導を受けて良かったと思うか

４．考察

本研究では、管理栄養士養成課程の実習の事前事後指導に関する科目である「栄養総合演習Ⅰ」において、学生（4年生）10名をSAとして活用した。また、受講学生（3年生、108名）に自記式質問紙調査を行い、SAによる指導を評価してもらった。その結果、指導前には9割以上の学生がSAの指導を受けたいと回答しており、指導後には、分野別指導および各施設指導においては、ほぼ100%の学生が指導を受けて「とても良かった」または「良かった」と回答していた。また、全体指導においては約9割の学生が高い評価をしていた。したがって、SAの指導は、受講学生を満足させるものであったと考えられる。自由記述欄には、そのように答えた理由として、「分からないことを教えてもらえたから」や「不安が解消でき、実習の心構えができたから」、「パワーポイントの指導が的確だったから」等の記述があり、SAの教育効果は大きかったといえる。野波ら（2004）の報告においても、受講学生はSAのサポートに対し高い評価であったことを報告している。本研究でもおおよそ同様の結果が得られたといえる。

しかし、その一方で、SAの分野別指導や各施設指導を受けて「あまり良くなかった」と思う学生が1名（1.5%）おり、また、秋学期に指導を受けたいと「あまり思わない」、「全く思わない」学生も合計7名（7.1%）存在していた。今回はそのように答えた理由の記載がなかったため、改善点につなげることはできないが、今後、SAとの相性が合わない学生や先輩からの助言を受けたくない学生もいるかもしれないことにも配慮する必要があると考えられる。

本授業は、学生が様々な施設で行う実習の事前事後指導を行うという特性上、個別指導が必要となってくる。しかし、本授業で個別指導として位置付けた分野別指導や各施設指導として、今回、個人やグループに対して直接指導を受けたのは67名（63.2%）、受けていないのは39名（36.8%）であった。春学期中に実習が配置されている学生には、教員から積極的に分野別指導と各施設指導を受ける機会を設定し、指導を受けるよう教員側が促したが、そうでない学生は、自主的に指導を受けなければならなかった。このことが、個人やグループに対するSAの直接指導を受けなかった学生が約4割であったことに反映されていると考えられる。今回、SAからの指導を学生全員に受けてもらうため、全体指導としてSAによるレポート添削指導とパネルディスカッションを実施したが、学生全員がSAから均一な指導を受けたとはいえない。したがって、今後、受講学生全員が満遍なく指導を受けられるように業務内容を検討していく必要がある。

また、今後、このような業務を通してSA自身の成長に関しても考えていく必要があるといえる。アメリカでは、学生に対して教育サービスを提供するために選ばれ、訓練された学士課程の学生のことを総称的にピア・リーダーと呼び、多くの研究によってその有効性が報告されている（立山，2013）。ピア・リーダーは、学業において優秀かつ教員の信頼も得ている上回生であるが、自身の学びや成長が強く意識されており、挑戦的な役割を果たすことができるよう、計画的、継続的に研修やガイダンスを受けることと

なっている。すなわち、優秀な学生に更なる学びと成長の機会を与えているといえる（立山，2013）。我が国においては、業務を通し、SA自身は、メディア活用能力が身についた、教員や職員、学内の友人との交流が増えたといった効果を実感していることが報告されているが、同時に著者らは、今後の課題としてSAのための事前研修の必要性を示唆している（岩崎ら，2008）。また、看護学系授業におけるSA活用の際の改善点として、事前のSAの育成が必要であることを報告している（高瀬，2017）。本研究では、毎回の授業前に10分間で、今回の業務を担当教員から説明したが、業務内容の説明しか行っておらず、SA自身への調査も行っていない。今後は、SAに対し系統立てた研修を行い、SA自身の成長も考慮した研究を行っていきたい。

５．まとめ

本研究では、管理栄養士養成課程の必須科目である臨地・校外実習の事前事後指導のための科目においてSAを活用し、指導を受けた学生の満足度は高かったことを明らかにした。しかし、今後は受講学生全員に対し均一的な指導を受けられるようにすること、また、業務を通したSA自身の成長に関しても考慮してくことが今後の課題であることが明らかとなった。

参考文献

岩崎千晶・久保田賢一・水越敏行（2008）．組織的な教員支援としてのスチューデント・アシスタントの効果と課題，日本教育工学会論文誌，32（suppl.）：77-80.

高瀬加容子（2017）．看護学系授業におけるPBLテュートリアル教育についての考察―スチューデントアシスタントを活用して―，東海学園大学教育研究紀要，2：77-87.

立山博邦（2013）．大学におけるスチューデント・アシスタント（SA）制度の考察―日米比較の視点から―，社会システム研究，26：137-150.

野波侑里・中崎修一・佐々木英洋ら（2004）．大手前学園伊丹キャンパスにおける情報教育関係スチューデント・アシスタントの実態調査報告，4：163-185.

毛利康俊（2006）．Student Assistant制度の創設について，西南学院大学法学論集，38：161-167.

文部科学省中央教育審議会（2000）．大学における学生生活の充実方策について（報告）―学生の立場に立った大学づくりを目指して―.